チャアダーエフとその時代
—ロシア思想史講義ノートから—*

御子柴　道夫

前回の講義で僕は、ロシア思想の座標軸を、西欧のキリスト教すなわちカトリシズムに対峙するロシアのキリスト教、ロシア正教だと仮定し、19世紀のロシア思想はこの座標軸を否定し、別の思想的伝統を意識的に導入しようという動きによって幕をあけると示唆して終わりました。そういった別の思想的伝統としてカトリック的原理を掲げたのがピョートル・チャアダーエフ（1794-1856）の『哲学書簡』（執筆1828-30、発表1836）なのです（外川継男訳が北大スラヴ研究所発行『スラヴ研究』6－9号、1963-64年に掲載）。この著作によって19世紀のロシア思想は実質的に始動しはじめます。

ただこの著作の検討に入る前に、これから述べてゆくことになる19世紀前半、少なくとも1840、50年代までの、スラヴ派西欧派を中心とした主だったロシア思想家の多くがナポレオン戦争中に幼少年時代を送った世代である点をことわっておきます。チャアダーエフは、彼らよりも一世代前、1825年12月14日のデカブリストの乱に連座した貴族たちと同世代で、彼自身も彼らと接近します。そこで19世紀ロシア思想史第一世代ともいうべきデカブリストたちを生んだ背景について簡単に述べておきます。（話が前後するが、チャアダーエフ以外のデカブリストの思想については、キュヘリベーケルを中心に次の講義で論ずるつもりで、デカブリストの乱についてもそのおりに話します）。

ところでこの世代の知識人たちの大半は（貴族が大勢を占める）ナポレオン戦争を経験しており、その多くが従軍しています。この戦争の発端から結末にいたる全体については今更述べません。ただロシア知識人の動向との絡みで言うと、1812年６月のナポレオン軍のネーメン河渡河から始まるロシア国内の戦役、いわゆる祖国戦争は無論のこと、この年の12月ナポレオン軍がロシアから敗走した後の、それに続く1813年春からのドイツ解放戦争、10月のライプツィヒの戦い、1814年３月のロシア軍も含む同盟軍のパリ占領が精神面でも彼らに大きな影響を与えたことは否めないでしょう。チャアダーエフも1812年５月に弟と共にセミョーノフスキイ連隊に近衛少尉補として入隊し、ボロディノの戦いから、タルティノ、マロヤロスラーヴェツと転戦し、さらにドイツのバウツェン、クルムバハ、そしてライプツィヒの戦いへと参戦し、パリに赴いています。なお彼の連隊には、モスクワ大学での学友であり（後日彼の親友となる）、後にデカブリストの北方結社に入るイヴァン・

---

* 本稿は、御子柴道夫教授の退職にあたって、編集委員会より御子柴教授へ寄稿を求めたものです。ここころよく原稿をお寄せいただき、感謝申し上げます。（『言語文化論叢』編集委員会　記）

ヤクーシキンも入隊しています。ついでにチャアダーエフの大学時代の学友にはニコライ・トゥルゲーネフ、アルタモン・ムラヴィヨフ、ニキータ・ムラヴィヨフ、A.ヤクボヴィチといったデカブリスト、それに『知恵の悲しみ』の作者として有名なグリボエードフがおり、彼らはみなナポレオン戦争に参戦しています。

これらいわゆるデカブリスト世代の思想的背景について、セルゲイ・ソロヴィヨフ（1820-79）と並ぶロシア史学の大家ワシーリイ・クリュチェフスキイ（1841-1911）がその主著『ロシア史講話』第84講の中で面白い指摘をしています（この著書には翻訳があります。八重樫喬任訳全４巻、恒文社、図書館で読めます）。少し僕流の説明を加えながらその趣旨をまとめると。彼らデカブリスト世代の人々は、18世紀エカチェリーナ二世治世の、フランス啓蒙主義の影響を受けた自由思想家の子であり、感情の豊かさ、思想の優越性への認識、個人の利益を犠牲にさえする善意に満ちた意欲という点で親の世代とは異なっていた。クリュチェフスキイを引用すると、「父親は自由思想家であり、その子は自由に思想する実践家であった」。そしてここが面白い点ですが、クリュチェフスキイは彼ら子の世代が受けた教育の違いに注目します。すなわち、18世紀末にフランス革命によって多くのフランス人亡命者がロシアに逃げてきたが、その大半がカトリック教会の修道院と関わりのある人たちだった（修道院長、修道院出身の貴族等）。クリュチェフスキイは、フランス革命で追放されたマルタ騎士団（12世紀第一次十字軍時代のヨハネ騎士団に起源をもつ）に対するパーヴェル一世の庇護と教皇クレメンス14世により解散されたイエズス会士たちのロシアへの潜入に特に注目します。ともかくも、自国フランスでの新しい政治理念への憤激と過剰なカトリック的感情を携えてロシアに来たこれらの亡命者がロシアの教養階級の啓蒙主義的合理主義の伸張を恐怖の目で見て、ロシア貴族の子弟たちの教育へと積極的に参与するようになった。クリュチェフスキイによれば、これは、高い教養も思想ももたない理髪師のような第一次の外国人家庭教師、自由思想家の第二次家庭教師を経て、ロシアに登場した保守主義者とカトリック教徒からなる第三次の外国人家庭教師ということになります。彼の言葉を引用します。「カトリック的イエズス会的な影響が、これらの若者（デカブリスト世代の若者）のなかで彼らの父たちのヴォルテール的伝統と出会い、カトリック的な不寛容も冷たい哲学的合理主義をも和らげたように思われる」。

一方ナポレオン戦争、特に1812年のナポレオン軍のロシア侵攻は、ロシア人の中に――貴族の将校から農民にいたるまで――激しい愛国心とフランスに対する憎しみの気持を募らせました。愛国心は祖国戦争以前、19世紀初頭からロシアの教養社会に次第に顕著になってきており、それが一方では、フランス語の影響を受けた新しいハイカラなロシア語に対する、教会スラヴ語に基づく伝統的なロシア語への評価の機運となって、アレクサンドル・シシコーフを座長とする「ロシア語愛好者の会」が生まれたりします。また一方では――特にナポレオン戦争後に顕著になるが――ロシアの歴史に対する関心が高まり、この機運の中で、実はシシコーフの論敵であった新ロシア語の普及者カラムジーンでさえ『ロシア国家史』の執筆にとりかかります（1816年から29年まで。全12巻）。いずれにせよこのナポレオン戦争をきっかけに、前世紀のエカチェリーナ二世時代からロシア上流社会に浸透

していたフランス文化に対する愛着は薄れ、特に知識人たちのフランス離れが顕著になるのです（但し当然ながら彼らにとってフランス語は日常会話レベルであった）。代わって登場するのがドイツの近代哲学に対する関心ですが、これについてはこのあとの講義で述べることになるはずです。

こういう時代の雰囲気のなかでチャアダーエフは育ってゆくのですが、このような時代風潮が彼にどのような具体的な影響を与えたかを論ずるのは難しい、とりわけカトリックのロシア社会への浸透が彼の幼少年期に影響したかどうか――これは今日の講義との関係で重要な問題だが――実のところ解りません。伝記的に判明しているのは、彼が幼くして両親を亡くし、弟と共に亡母の姉であるアンナ・シチェルバートヴァ公爵婦人（但し彼女はオールドミス）に引き取られ、伯父のドミートリイ・シチェルバートフ公爵の後見を受けたということだけです。このシチェルバートフ家はロシア貴族の中でも名門中の名門、伯父、伯母の父であるミハイル・シチェルバートフ（1733-90）は、ピョートル大帝から始まりエカチェリーナ二世に至る18世紀歴代の皇帝の宮廷生活を中心にいかにロシアの気風、風潮が堕落していったかを指弾した一文『ロシアにおける気風の破損について』をものし、この文書のあることを知ったエカチェリーナ二世が何とかそれを没収しようとしたけれど、相手が名門すぎて手が出せなかったという人物です（この書はラディーシチェフの『ペテルブルグからモスクワへの旅』と抱き合わせで1858年にロンドンに亡命していたゲルツェンによって始めて出版された）。

ここでは彼の伝記を述べるつもりはないけれど、デカブリストたちとの関係に簡単に触れておきます。彼が親友のヤクーシキンをはじめとするデカブリストたちと知己であり、何人かと親交を結んでいたのは事実です。但し実際に結社に加盟していたかには諸説があり、チャアダーエフ自身はそれを否定しているけれど、かなりの研究者たちが最初は福祉同盟に、後に北方結社に加盟していたと主張しています。ただデカブリストの乱が起きた1825年12月14日には彼はロシアにいなかった。というのはその前々年の1823年から翌年の26年までヨーロッパ各地を旅行してまわっており、1825年にはエルランゲン大学のシェリングと会って会談しており、またこの年の年頭には彼に深い印象を与えたイギリス人宣教師チャールス・クックと交友を結んでいます。帰国するのは1826年７月で、しかしすぐさま逮捕され、取調べを受け、８月に釈放され一旦はモスクワに戻るが、当局の監視下におかれます。そんなわけで彼はただちにモスクワを離れ、伯母のシチェルバートヴァ公爵婦人の持ち村に３年あまり籠もって孤高の生活を送ることになります。そしてこの期間に（1828-30年）『哲学書簡』全８通を執筆するのです（フランス語で）。

さて、いよいよ今日のテーマである『哲学書簡』の紹介に移ろうと思うが、その前に、君たちの中には文学に関心のある人が多そうですので、チャアダーエフとプーシキン（1799-1837）との関係について簡単に触れておきます。プーシキンはチャアダーエフに宛てた詩をいくつも書いています。まずあまりにも有名な1818年に書かれた「チャアダーエフへ」と題された詩を紹介します。この詩は直接にチャアダーエフその人をうたっているわけではないけれど、ナポレオン戦争終結後からニコライ一世が即位しデカブリストの

乱が起こるまでの、アレクサンドル一世治世の最後の時期の、落胆、絶望、息が詰る時代雰囲気、しかしそれでもそこに一筋の光を見ようとするデカブリスト世代の青年たちの気持を雄弁に語っています。色々な人がこの詩を訳していますが、今言ったような思想史的解釈がわりあいはっきりと感じ取れるように心しながら自分で訳してみます。

偽りの愛と希望と栄光は
そういつまでもぼくたちをなごませなかった、
夢のように、朝霧のように
青春のよろこびは消えうせた：
けれどもまだぼくらのうちには望みが燃えている、
逃れられぬ権力の重圧のもと
心を苛立たせつつ
祖国の呼びかけに耳すます。
待ちわびることに疲れはてつつぼくたちは
聖なる自由の時を待つ、
若い恋人が
晴れて逢う日を待つように。
ぼくらのうちに自由が燃えたち、
心の誇りが失せないかぎり、
わが友よ、魂の美しいほとばしりを
祖国にささげよう。
同胞（はらから）よ、信ぜよ：心ときめかす幸福の星が
かならずや輝きのぼり、
そしてロシアは眠りから覚め、
打ち砕かれた専制政治の瓦礫の上に
ぼくらの名前が刻まれることを。

もう一つ、今度はチャアダーエフ自身をうたった「チャアダーエフのポートレートに」という短い戯れ詩（プーシキンの生前には発表されなかった。1817年から20年の間に書かれたと推定）を紹介しましょう。

彼は、神のみ旨に従って
皇帝に奉仕すべき軛のもとに生まれはしたが：
彼こそはローマにあればブルータス、アテネにあればペリクレス、
だがこの地では一介の騎兵将校。

大変な惚れ込みようですが、二人の出会いは先ほどちょっと名を出したカラムジーン邸

においてです。1816年『ロシア国家史』の執筆にとりかかるにあたりこの大家はツァールスコエ・セローに転居した。当地のリツェイの生徒だった17歳のプーシキンは連日のようにカラムジーン邸を訪問したのです（カラムジーン夫人36歳に恋文を渡したエピソードは有名）。当時ちょうどチャアダーエフの属していた近衛騎兵連隊も当地に駐屯しており、カラムジーンは彼がM.シチェルバートフ公爵の孫であるのを知り、資料を求めてこの将校を自宅に招いたのです。たちまちに将来の大詩人は５歳年上のこの将校にほれ込んだようです。

さて、いよいよ今日の本題に入りましょう。先ほど述べたように『哲学書簡』８通は1828年から30年にかけてフランス語で書かれた。その第一通目がロシア語に翻訳されて1836年『テレスコープ』誌（モスクワ）34巻15号に掲載されたのです。これが発表された時の強烈な印象をゲルツェンは後に『過去と思索』の30章で次のように語っています。なおこの大部の著書は、しばらくはこの講義のテーマになる19世紀前半のロシア思想の動向を知るうえでの必読書です。幸いなことに金子幸彦の旧訳に弟子の長縄光男が手を加え、未訳部分も訳出した完全版の翻訳があります（筑摩書房、全３巻）。現在は品切れのようだが、図書館で読むことができます。この訳書から引用します。「チャアダーエフの『哲学書簡』は一種の最高の到達点であり、境界であった。それは闇夜にひびいた銃声であった。それは何かが溺れて死んだことを告げ知らせる合図なのか救助を求める叫びなのか、それとも夜明けは近いという知らせなのか、あるいは夜明けはこないだろうという知らせなのか――いずれにせよ、目を醒ますことが必要であった…『知恵の悲しみ』の後には、このような強烈な印象を与えた文学的著作は一つとしてなかった」。後段では「チャアダーエフの『哲学書簡』はピョートルのロシアに向けられた、苦痛と非難の容赦なき叫びである」とも語られています。

ところがこの第一書簡が発表されるや、チャアダーエフはニコライ一世から狂人のレッテルを貼られ、終生自宅監禁、土曜日ごとに警察医の定期検診を生涯にわたり受けるという処分にあいます。また『テレスコープ』は即廃刊、論文発表を許可した検閲官のモスクワ大学学長ボルドウィリョフは免職、雑誌発行人のナデージジンはウスチ・スィソリスク（現在のコミ自治共和国の首都、現在の名はスィフトィフカール）へ流刑になります。

なお、ゲルツェンの『過去と思索』30章、「ピョートル・ヤコヴレヴィチ・チャアダーエフ」の節にはまだまだ面白い描写と説明が記されているが、このへんで『哲学書簡』の内容に入りましょう。ただし、時間の都合上、全８通のうち第一の書簡だけを紹介することにします。またチャアダーエフはこの事件の翌年に、見かけ上はこの書簡と主張を逆転させた『狂人の弁明』という文章を書くのですが、それについても触れません。今後の講義についても言えることですが、思想家をとりあげても、彼の全思想あるいは思想体系、生涯における思想の変遷という面は切り捨てて、一つか二つの著作の内容を紹介するにとどめます。

さて『哲学書簡』ですが、これは無名の夫人宛の手紙という形式をとっています。第一書簡は、「奥様」という呼びかけの前に「み国の来たらんことを」という主の祈りの一節

がラテン語で書かれています。そして手紙の末尾は「ネクロポリス、1829年12月１日」との記載で結ばれているが、ネクロポリスとは死者の都という意味です。書き出しは、「私があなたのうちで最も愛し評価している特長はまさにその率直さと真摯さなのです。あなたのお手紙がどんなに私を驚かせざるをえなかったか想像なさってください。お近づきになりました際、あなたのこういったこのうえなく愛すべきお人柄が私を魅了したのであり、だから私は、あなたの周囲のものことごとくが私に沈黙を強いたというのに、あなたと宗教について話す気を起こしたのです」と始まり、しばらくは宗教論が展開されます（なお、これ以降は書簡体はやめて普通の論文調に訳す）。「（信仰の）外面的な諸条件に関しては、さしあたり、統一、ならびに真理に仕える者たちの途絶えることなき継承における真理の直接の伝承という、至高の原理の上に打ち立てられた教義を知れば十分である」。すなわち教会を肯定すれば足りると言うのです。「いつぞや私はあなたに言ったと思う。宗教的感情を維持する最良の方法は、教会によって命じられたすべてのしきたりを守ることだと。恭順のこのような訓練を自分に課すことは、通常考えられているよりも重要である。最も偉大な知者たちが熟慮し自覚をもってこの恭順を自分に課したのだし、神への真の奉仕もこの点にあるのだ」。ここまではかなり保守的な教会尊重論に思われるかもしれません。

ところがいささか唐突に論はロシア批判に移ってゆきます。人間には肉体面と同様に精神面でも規則があって、これは古くから認められた真理なのに、わが国ではこれが未知の何か新奇なものなのだと主張されます。「わが国独自の文明の最も悲しむべき特徴の一つは、他の国々では――ある面で私たちよりももっと遅れている国民にあってさえ周知の真理が、いまだに啓示されている途中だという点にある。問題は、私たちがこれまで一度も他の国民と手を携えて歩んでこず、人類の既知の諸家族のどれにも、西方にも東方にも属さず、このどちらの伝統ももっていないという点にある。私たちはまるで時間の外にたたずんでいるかのようで、人類の全世界的教養は私たちにまでは及ばなかった。世代の交替のなかで継承されている人類の諸イデーの絶妙の結びつき、そして他のすべての世界で現在の状態へと達した人間精神の歴史は、わが国には何の影響も与えなかった。他の国民にあってはとうの昔に社会と生活の本質そのものとなったものが、私たちにはまだ理論と思弁でしかないのだ」。チャアダーエフによるとそのものとは、モラルや哲学といった高尚なものではなく、心に安らぎを与え、精神生活に規律をもたらす、秩序だった生活、慣習、意識のおだやかな進行にすぎないのです。

「自分の周囲を見回せ。何か一箇所にしっかりと立っているものがあるだろうか？すべてがまるで進行中だ。誰にもしっかりとした行動の領域がない、どこにも良き慣習がなく、確固たる規律がない、あなたがたの共感、愛情を呼び起こし、あなたがたを結びつける家庭さえない、恒常的なもの堅固なものは何もない。すべては消えゆき、流れ去り、あなたの内にも外にも何の痕跡も残さない。家の中にいながら私たちはまるで露営をしているかのようだ。家族の中にいながらよそ者のようだ。町にいながら遊牧民のようだ、いやわが国の草原で放牧している遊牧民の方がましだ。なぜなら彼らは、私たちが私たちの町につながっているよりも強く自分たちの荒野につながっているのだから」。

かといってこのような放浪性、無定形性は民族の青春時代のエネルギーの発露ではないとチャアダーエフは言います。だいたい「わが国には青春時代がない」と言うのです。「どんな民族（国民）にも激しい動乱、熱狂的な不安、無思慮な活動の時期がある。人々はその時期に肉体的にも精神的にもさまよう。それは民族における偉大な欲望、広大な構想、激しい情熱の時期である。この時期彼らは明確な目的なしに、しかし後世の世代にとって有益でなくもなく、凶暴さをもって狙いをつける。すべての社会はこのような時期を経てきた。これらの時期に民族は自己の最も鮮烈な思い出、奇跡的なもの、自己の詩、最も強力で実りあるイデーを得る。ここにこそ社会にとって不可欠な基礎がある。…民族の歴史におけるこの魅力的な時期がそれらの民族の青春期であって、この時期に民族の才が最も大きく発展し、またこの時期の思い出が、民族の壮年期における喜びかつ教訓となる。ところが私たちはこのような青春期をもたない。わが国ではそもそもの初めに未開な野蛮があり、ついで粗野な迷信、その後侵略者の凶暴で屈辱的な支配があった（『テレスコープ』の編集者はこれをタタールの軛のことと理解しました）。その支配の精神はその後のわが国の権力に受け継がれた――これこそが私たちの青春の悲しき歴史なのだ。…私たちは、平坦な沈滞のさなか、過去も未来もない、きわめて狭い現在にしか生きていない」。

「進歩のない野蛮さのうちに過ごしたわが国の最初の年々は、私たちの意識に何の痕跡も残さなかった。私たちには、私たちの思想が支えられうるような私たち個人に固有のものが何もない。運命の奇妙な意志によって人類の普遍的な動きから引き離された私たちは、人類が伝統的に継承してきたイデーをも摂取しなかった。ところがその実、民族の生活はこれらのイデーに基づいており、民族の未来や道徳的発展もこれらに由来するのである」。これらのイデーが何かはだんだんと明らかになります。もう少しロシア批判を見てみましょう。

「そもそも私たちは、遺産ももたず、先行する人々との絆ももたぬ私生児として世に現われ、だから私たちが存在する以前にもたらされた教訓を一つも心に刻んでいない。私たち全員が、人類という家族とのあいだの断ち切られた糸を新たに結ぶための方策を自力で探さねばならない。他の国民ではただの習慣、本能にすぎないものを、私たちは槌で自分の頭に叩き込まねばならないのだ。私たちの記憶は昨日という日より先には進まない。私たちは自分自身にとっても他人のようである。私たちは時間の道のりをまるで奇妙なふうに進んでいるので、一歩前進するごとに過去は取り戻しができずに消えてゆく。これは、すみずみまでの借用と模倣の文化の当然の結果なのだ。わが国には内的な発展、自然の進歩がまるで無い。古いイデーは新しいイデーによって一掃される。なぜなら新しいイデーは古いイデーから生じるのではなく、どこか外部から私たちのもとに現われるのだから。つねに出来合いのイデーしか受容しないから、知性のうちで思想が論理だって展開され、知性の力が作られてゆくような消えざる痕跡が私たちの意識に残されない。私たちは成長するが、成熟しない。前進するが、斜めの方向に、すなわち目標に導かれない線にそって進む。私たちは自主的に思考することを教えてこられなかった子供に似ており、だから成長しても自分のものは何もなく、知識はすべて表面的、心も自分たちの外にある。まさに

私たちはこのようであるのだ」。

これに対して西欧諸国はどうかというと。「ヨーロッパ諸国は共通の相貌をもっている。彼らはラテンとチュートン、南欧と北欧に大別されるが、彼らの共通の運命に通暁した人には明らかなように、彼らを結びつける共通の絆がある。ご存知のように割合最近もヨーロッパ全体がキリスト教世界という呼称で呼ばれており、この言葉が一般の法律にも記されていた」。ここにヨーロッパを一つにする共通の絆としてのキリスト教という認識が登場するが、しかしこの箇所ではまだキリスト教については詳説されず、キリスト教以外にもヨーロッパ諸国民は歴史と伝統の織り成す固有の特性をもち、これらのすべてが彼らのイデー上の相続財産となっているのだと主張されます。ただここで言っているのは学問や読書や科学とか文学といった高尚なものではない。「…単に意識の触れあい、揺籃の中で子供の身につき、遊戯のうちにその子をとりまいているような考え（思想）、母が愛撫のうちにわが子に吹き込む考え、さまざまな感情のかたちをとって、呼吸する空気と一緒に骨の髄まで浸透し、社会人になる以前に彼の道徳的本性を形成するような考えである」。この考えとは「義務、公平、権利、秩序のイデーである。それらは、社会を形成した諸事件そのものの中から生まれ、これらの国々の社会の構成要因をなしている。これこそが西欧の雰囲気をつくっている。これは歴史以上のもの、真理以上のものである。これはヨーロッパ人の生理なのだ」。

この後、ヨーロッパと比較して、再びロシア批判へと論は戻ります。「一方、東洋と西洋という、世界の二大領域の間に大きく広がり、一方の肘で中国に、もう一方の肘でドイツに寄りかかりながら、私たちは、自分の中で精神的本性の二つの偉大な基盤――想像と理性を結びつけ、おのれの文明のうちに地球全体の歴史的運命を統一すべきはずだったのだ。ところが神が私たちに与えたのはこの役割ではなかった。逆に神はまるで私たちの運命に関与しなかったかのようだ。…歴史的経験というものは私たちには存在しない。時代も世代も私たちには何の実りももたらさず過ぎ去った。私たちを見れば、人類に共通の法があてはまらないと言えるだろう。世界の孤児である私たちは、世界に何も与えず、世界から何も受けず、人間理性の進歩に何の働きかけもせず、この進歩から得たものを歪めてしまった」。

こういったロシアの停滞の原因はロシア史の中に求められることになります。「かつて偉大な人物がわが国を文明化しようとして、啓蒙へと駆り立てるために私たちに文明のマントを投げかけた（ピョートル大帝の改革のことです）。私たちはマントを拾いあげたが啓蒙には触れもしなかった。つぎに別の偉大な君主がその栄えある使命に私たちを与らせようと、勝利をもって私たちをヨーロッパの端から端へと導いた（アレクサンドル一世とナポレオン戦争のことです）。しかし世界で最も文明化した国々を通りこの凱旋の行軍から帰国した時、私たちが持ってきたものは劣悪な諸思想と破滅的な誤解だけ、その結果は、私たちを半世紀も後戻りさせたカタストロフであった」。

批判の矛先は、いよいよビザンチン的伝統、正教、つまり前回の講義で僕がロシア思想の座標軸とみなしたものに向けられます。「悪しき運命に導かれた私たちは、私たちを養

育するはずの道徳的教えを、これら西欧諸国の人々からとことん軽蔑されている堕落したビザンツに求めた。そのちょっと前に、一人の野心家がビザンツというこの一家を全世界的な兄弟の結びつき（ロシア語ではフセレーンスコエ・ブラーツトヴォと訳されている）から引き離した（これは前回に説明した9世紀のフォテイオスをめぐっての東西教会の分離を意味します）。その結果私たちは、人間の欲情に歪められた様相のイデーをビザンツから受け取った。一方当時ヨーロッパではすべてが統一の生き生きとした原理に息づいていた。すべてのものがこの原理から発し、この原理に集中していた。この時期のあらゆる知的運動が人間の思想の統一をうちたてようと志し、あらゆる意欲が、後に近代を鼓舞する思想となる世界イデーを探そうという強力な要求に基づいていた。この奇跡的なイデーに無縁な私たちは征服の犠牲となった（タタールの軛のこと）。後に異国の軛から開放された時、私たちはこの期間に西欧の私たちの兄弟のあいだで花開いていた諸イデーを利用できたはずだ。ところが私たちは、軛を免れたという事実そのものによって自分を聖化させ、共通の家族から離れ、いっそう酷い奴隷状態へと陥ってしまった」。

このあと論はキリスト教の問題、西欧のキリスト教、つまり文明原理の核としてのキリスト教と、ロシアのキリスト教との本質的な違いへと進んでゆきます。「分離（スヒズマ）」のうちに閉じこもった私たちには、ヨーロッパで生じた何ものも届かなかった。私たちは全世界的な偉大な事業にいっさい関与しなかった。宗教が同時代の諸民族に恵与した優れた特性…宗教が人間の知性を豊かに富ませた新しい力…そういうものは一切私たちを素通りした。（西欧の）キリスト教がその神なる創始者（キリスト）によって示された道を堂々と行進し、幾世代もの人々を惹きつけていたまさにその時に、私たちは、私たちが帯びているキリスト教徒という名前に反して、その場から一歩も踏み出さなかった。全世界が新しく再建されたのに、わが国では何も築かれなかった。私たちは以前どおり丸太と泥で出来た掘立て小屋の中で押し合いへし合いしていた。要するに人類の新しい運命は私たちのために成就されていったのではなかった。私たちはキリスト教徒であるが、キリスト教の果実が熟したのは私たちのためではなかった」。

チャアダーエフの考えるキリスト教とは次のようなものなのです。「キリスト教は、人間理性の儚い形式をとって受容された道徳体系としてばかりでなく、意識の世界で普遍的な形象をとって働いている神の永遠の力としても啓示されているのだから、その力の可視的なあらわれは私たちにとって間断ない教訓として働かねばならない。この点に一つの公の（フセレーンスキー）教会についての信条のドグマ（前回にお話したニカイア・コンスタンチノープル信条を思い出してください）の本来の意味がある。キリスト教世界では、地上における完全な機構の構築に向かってすべてが導かれねばならず、実際にこのことへと導かれている…」。ここで主張されているのは全人類が実際にこの世に完全な全世界的機構、換言すれば神の国を築くために協力するということなのです。彼によればキリスト教はこのことを教えているのです。そしてヨーロッパはこの道を歩んだと言うのです。これが文明の道なのです。

ただその道の考察に移る前に、はたしてヨーロッパ風にしか文明化はなされえないのだ

ろうかとの疑問が提示されます。

「あなたは言うだろう、しかしはたして私たちはキリスト教徒ではないのか、ヨーロッパの手本に倣わずに文明化することはできないのかと。たしかに疑いも無く私たちはキリスト教徒である。しかしエチオピア人もキリスト教徒ではないのか。もちろんヨーロッパにおけるのとは違う風に文明化されることも可能だ。はたして日本は文明化されていないのか、そしてわが同国人たちの一人（これは1811-13年に日本で捕虜になった艦長ヴァシーリイ・ゴロヴィンのことを指すというのが定説になっています。翻訳が読めます。ゴロウニン『日本俘虜実記』上下巻、徳力真太郎訳、講談社学術文庫）の言を信じれば、ロシアよりもはるかに高度な段階で文明化されている。しかしはたしてあなたは考えるだろうか、エチオピアのキリスト教と日本の文明が、私がたった今語ったあの機構、人類の究極の目的であるあの機構を確立していると。はたしてあなたは考えるだろうか、神と人間の真理からのこれらのばかげた逸脱が地上に天をもたらすことであると」。

ヨーロッパだけが地上における完全な機構の構築という一つの目的をめざして文明の道を進んだと言うのです。「ヨーロッパのすべての民族は何世紀ものあいだ手を携えて歩んできた。彼らがそれぞれ自分流の道を別々に歩もうとしても、やはり彼らはいつでも同じ道に集まってくる。これらの民族の発展における一つの家族としての同一性を知るためには歴史を学ぶ必要さえなかろう。…15世紀もの間彼らは神に呼び掛けるための一つの言葉、一つの道徳的権威、同一の確信をもちつづけてきたことを思い出せ」。ここでいう一つの言葉とはラテン語を、一つの権威とは教皇を、同一の確信とはカトリック信仰を意味していると考えて間違いではないでしょう。ヨーロッパ文明の核としてカトリシズムが評価されるのです。続けます。「このことのあとではっきりするのは、ヨーロッパ人が生きている社会、そしてこの社会だけしか人類をその究極の目的に導きえない、そういった社会が宗教によって彼らにもたらされた影響の結果であるのなら、そして私たちの信仰の弱さや教義の不完全さが私たちを、あの世界的な動き――その動きの中でキリスト教の社会理念が発展して一定の表現を得たのだ――の外に取り残したのであるなら、…私たちは、あらゆる方法で自分たちの信仰を蘇らせ、真にキリスト教的な推進力を自分たちにあたえなくてはならないということだ。…わが国で人類の教育を再びはじめねばならないと言うとき私が念頭においていたのはまさにこのことなのだ」。

近代にいたるヨーロッパ文明の歴史をチャアダーエフは段階づけます。まず揺籃期。この時期には宗教的迫害、殉教、キリスト教の普及、異端、宗教会議、蛮族の侵入があった。ついで第二期、そこではヒエラルキーの形成、精神的権威の中央集権化、北方諸国へのキリスト教の継続的な普及が起こり、宗教感情が最高度に高揚し、宗教的権威が強化されたとされるが、これは明らかにローマ教会の歩みです。そして近代がくるわけですが、引用しましょう。「宗教の影響の下での意識の哲学的文学的発展が、古代の選民の歴史（ユダヤ人の歴史を意味しているものと思われます）と同様に聖なる歴史と呼ぶことのできるこの歴史を終わらせつつある。そして最後に、宗教的リアクション、宗教により人類の精神に伝えられた新しい一突きによって、今日の社会状況も決定させられている」。少し解り

にくいが、チャアダーエフは近代におけるこのような社会の発展を信念に基づくものとみなします。信念に基づくこの発展が結局は概念ないし思想の世界をつくりあげるのです。

「…皮相な哲学が、宗教戦争や不寛容により点火された火刑の薪に関していかにわめきたてようと好きにさせておけ。私たちに関して言えば、私たちは、信念のこの衝突の中で、真理を守るための血なまぐさい争いの中で自分たちに概念の世界をつくりあげていった民族を羨むことしかできない。このような概念世界を私たちは思い浮かべることさえできない、まして私たちが渇望しているように心と体でその世界へと跳躍することなどかなうべくもない」。

「もう一度繰り返す。もちろん、ヨーロッパの国々のことごとくに、知と徳と宗教が満ち満ちているわけではない。まったく違う。しかしそこでは、何世紀もの間引き続いて独占的に支配してきた力にすべてのものがひそかに従っている。そこではすべてのものが、今日の社会の状態をつくっている行動と思想の継続的な連鎖の結果なのである」。この力がヨーロッパのキリスト教であることはもちろんです。しかしチャアダーエフはこのキリスト教を人間の心の中の信仰ととらえているわけではありません。

「キリスト教の働きは人間の魂に対するその速やかで直接的な影響に決して限定されない。キリスト教が示すべく召命されている最も強力な働きは、多くの道徳的知的社会的連合のうちに実現される。そこでは人間精神の完全なる自由がかならずや無限の広さを見出すはずだ」。つまりチャアダーエフの考えるキリスト教は人間社会、人間文化の原動力となるものなのです。だからもっと後、ほとんど論の終わりの方では次のようにも語られます。「…しかし、全体としての社会に対するキリスト教の働きはもっと驚くべきものだ。近代社会の発展の様相全体に目をやるや、あなたは見るだろう、人々のあらゆる利害をキリスト教自身の利害に変容させ、いたるところで物質的要求を道徳的要求にとって替えているのを。また思想の領域では、かつてどの時代にもどの社会にも見たことのない偉大な論争が起こり、諸信念の間に熾烈な闘いがくりひろげられ、その結果諸国民の生活が一つの偉大なイデー、すべてを包括する感性へと変貌していったのを」。

そしてチャアダーエフは次のように言い切るのです。「…現在構成されているヨーロッパ社会のあらゆる不完全さ、欠点、罪にもかかわらず、それでもやはりヨーロッパにはある意味で神の国が実際に実現している。なぜならその社会は、自己の中に無限の進歩の原理を含み、胚芽と要素の形で、将来神の国をこの世に最終的に打ち立てるために必要ないっさいのものを孕んでいるのだから」。

まだ少しキリスト教に関する考察が続いて、この「第一書簡」は閉じられますが、もう十分でしょう。著作そのものがいっさいを語っているのだから、蛇足になるが、最後に２、３の点を念押ししておきましょう。まずチャアダーエフは、信仰の問題を論じるのだということをこの第一書簡だけでなく、他の書簡でも何度も繰り返すが、しかし彼の語るキリスト教は個人の心の中で信じられるものではなく、社会を、文明を形成し前進させる力なのです。つまり彼は文明論の枠内でキリスト教を論じているのです。そしてその文明論の背後には当然ながら歴史認識があります。つぎにこの論文の各所に見られる「全世界的な

兄弟の結びつき」とか「全世界的イデー」「共通の普遍的家族」などの言葉にも注目しておきましょう。すなわち僕はこの論文の背後には普遍的なもの、全人類的なもの、カトリケーなものへの憧憬、志向が潜んでいるのではないかと思うのです。もちろんチャアダーエフはそれをヨーロッパに見て、ロシアをその「全世界的なもの」から取り残された孤児と見ます。そしてチャアダーエフにあって後者を強調したかったと考えるのが通常の解釈でしょうが、僕は前者の部分も無視はできないと思う。すくなくとも19世紀ロシア思想において、やがてこの「全世界的結びつき」「全世界的イデー」が重要な意味をもつ時が訪れます。